

I 若手研究者研究教育プログラム試行

富山大学経済学研究科と本センターが共同で企画する富山大学東アジア「共生」学創成の学際的融合研究 (CEAKS) / 若手研究者育成研究教育プログラム「人の移動を管理する：アジアおよびユーラシアの経験」が、今年 10 月 16 日から 18 日までの 3 日間開催されます。富山大学東アジア「共生」学創成の学際的融合研究 (CEAKS) での事業を基盤とした富山大学における地域研究の振興、教育への還元の一環として若手研究者を対象とした研究教育プログラムを実施し、北東アジア諸国における富山大学の研究教育プログラムのニーズや課題を見いだすことを目的とする実験的事業です。

この研究教育プログラムには、極東地域研究センターと学术交流協定を結ぶロシア科学アカデミー社会政治研究所の協力のもと、ロシアの若手研究者が多数参加するとともに、富山大学内外の院生・学生たちも参加し、交流を行うことになっています。



写真 1. 社会政治研究所との学术交流協定締結式。

主な講師陣には、ロシアの人口学で著名なレオニード・リバコフスキー先生、国連人口基金からリディア・バルダコヴァさん、北大から田畑伸一郎先生らを迎え、富山からも小倉利丸経済学部長や外国人子弟の日本語教育に尽力するボランティアグループ「勉強お助け隊」の米田哲雄さんらが参加し、ユーラシアおよび北東アジアというグローバルな局面から富山というローカルな局面での移民研究のあり方や方法論を共に学ぶ企画となっています。

現在、企画実施に向け着々と準備中です。富山大学の人文社会科学系教育には博士課程がなく、若手研究者のための研究教育プログラムの実現は、富山大学にとっても新たなチャレンジです。若手研究者の定義は人それぞれ。老若男女ご参加を歓迎します。詳しくは、富山大学極東地域研究センターホームページにて広報予定です。

(文責：堀江)

II 研究紹介 (6) -経済研究班・今村弘子-

今でこそアジアは観光旅行の人気スポットであるが、1ドル=300円台の1970年代には一世代の洋行といえば、欧米であったのだが、私が始めて行った外国は1975年の中国だった。大学でも新設のアジア科の第一期生として、学生4人に先生10人、しかも私以外の学生は大学に来ないというなかでたった一人の卒業生となった(つまり「絶後」ではないけれども「空前」の成績で、ナンバーワン、バットオンリーワンの成績で卒業したのである)。

最初の職場である日本貿易振興会では中国チームに配属された。当時の中国チームは中国の研究を全員が行い、その他のアジア社会主義国を1~2人が担当することになっており、私は北朝鮮の担当となった。とはいえ当時、北朝鮮に関する問い合わせは年に2~3回しかなかった。

中国人の北朝鮮問題専門家と話をするうちに、次第に中国を通じて北朝鮮を見る面白さを感じ始めた。1980年代の時点ですら中国の専門家はかなり冷静な(冷めた)目で北朝鮮を見ていたからである。また日本国内で北朝鮮の政治を研究している人はいるが、経済を研究している人がほとんどいなかったこともあり、北朝鮮経済、とくに中朝経済関係が私の研究テーマになっていった。

もちろん本業の中国経済については対外経済関係を中心に研究を行っている。私にとって幸運だったのは改革開放の初期から中国経済を見続けることができたということだろう。最近是中国の変化が激しくて追いついていくだけで精いっぱいなのだが。

現在行っているもうひとつのプロジェクトは、「東アジア分断国家における共生の可能性」に関する研究である。富山大学で行っている「東アジア『共生学』創成」プロジェクトの一環として行われており、東アジアにおける分断国家、即ち中台と朝鮮半島の比較考察を行いながら、そもそも「共生」とは何かを考え、現在の「共生」の立ち位置、および将来その関係性が各々どのように変化していくかについても考えるものである。学外の専門家も含めて研究を行っており、その成果は今秋には出版される予定である。

(文責：今村)

III 研究セミナー報告

去る5月29日、講師に小林真博士(横浜国立大学大学院環境情報研究院)をお招きし、富山大学理学部にて本年度1回目の極東地域研究セミナー(後援:高低差4,000m富山環境プロジェクト)

ト)を開催しました。演題は「北極圏ツンドラ生態系において土壌の凍結融解が果たす生態学的役割」であり、理学部の学生等 11 名が参加しました。高緯度地域の寒冷地生態系においては、土壌は冬季には凍結し夏季には融解します。この季節的に起こる凍結と融解によって、土壌中の砂や粘土は地表面に移動し、その後中心から離れるように外側へとゆっくり運ばれます。このような土砂の流動により、地表面に幾何学的な模様が形成されます。小林博士は、北極圏内にあるスウェーデン北部のアビスコにて、この幾何学的な模様の土壌（非淘汰型円形土：NSC）を対象に、土壌の流動に伴う植生の変化について調べ、NSC の中心部から約 3 m 外側までのごく狭い空間の中に約 300 年に渉る植生の遷移系列が詰まっていることを明らかにしました。すなわち、NSC の中心部に近い場所では地衣類が優占し、外側に向かってコケ類や維管束植物が優占する群落に移っていました。数センチしか離れていない場所で、三百年の違いがあるとは驚きですね。この発表に対し、活発な質問がなされ、寒冷地における土壌-植生系の理解が深まりました。地球温暖化に伴ってこのような生態系がどのような影響を受けるのか、今後も注目していきたいと思えます。

(文責：和田)

IV 英国便り：Being at “Far West” (4)

山本雅資

6月27～30日にチェコのプラハで開催されたヨーロッパ環境・資源経済学会 (European Association of Environmental and Resource Economics: EAERE) 第19回年次大会にて研究報告を行いました。同学会ではヨーロッパ各国を中心に世界各国の研究者によって総勢約470の研究発表が行われました。



図2. W. Nordhaus 教授(Yale Univ.)の基調講演。

幸か不幸か、図2で基調講演が行われているのと同じ部屋をセッションであてがわれた私は、わずかな聴衆に対して3つのスクリーンを使うという何ともしまりのない体験をしました。ただ、私が発表した論文の中で何本も論文を引用して

いるイタリア人研究者がわざわざ足を運んでくださり、終了後に声をかけてくれたのは大変有り難く思いました。今後の共同研究についての提案もいただき、美しいプラハの街並みと合わせて、実りの多い学会となりました。

(文責：山本)

V 地域研究四方山話 (5) 中国トイレ事情

中国のトイレと聞くと「你好^{ニーハオ}トイレ」を思い出す方がいるかもしれない。個室の仕切りがなく、用をたしながらおしゃべりするのが「你好トイレ」である。さすがに現在はこの形式のトイレは都会ではみなくなった。それどころか北京市ではこのたび「北京市主要業界公衆トイレ管理サービス業務基準」が設定され、「公衆トイレの廃棄物の停滞時間は30分を超えないものとし、ハエの数は2匹を超えないものとする」という規定となった（「人民網」2012年5月12日）。つまり北京市内でも現在はまだハエが2匹以上いる公衆トイレが沢山あるということである。

中国の公衆トイレでは個室の外にトイレトーパーが設置されている場合もある。必要量を予め切り取って個室に入るのである。幸い私自身はこれまで「想定外」に見舞われたことはないが、もし「想定外」の事態が起こったらどうすればよいのだろう。紙といえば、中国では（韓国でも）トイレトーパーを流してはいけない。「つまり」の原因になるからである。

中国、とくに北方は水汚染と水不足が甚だしい。水の循環システムも不十分である。水洗トイレを利用するたびに「水に流す」のではない、何か画期的なシステムはないものかとついつい「考える人」になってしまう。

(文責：今村)

VI 新生「FES」への投稿願い

極東地域研究センターでは FES (Far Eastern Studies) を発行してきましたが、2012年3月の Vol.11 をもってひとまず終了し、12号からは北東アジア学会から英文学会誌 FES (Frontiers of North East Asian Studies) として発行されます。同誌は北東アジアを研究対象としていけば、自然科学、社会科学、人文科学といったあらゆる分野を網羅します。また非学会員からの投稿も受け付けますのでふるってご投稿ください。12号の原稿締め切りは2013年5月末です。投稿は henshu-e@anears.net へ、投稿規定は http://anears.net/ej/submission_info_e.pdf をご覧ください。

(文責：今村)